

UNIVERSIDADE FEDERAL DO RIO DE JANEIRO
FACULDADE DE LETRAS

O USO DO DIALETO NA LÍNGUA DE KAGOSHIMA

GABRIEL DOS SANTOS XAVIER

RIO DE JANEIRO

2022

GABRIEL DOS SANTOS XAVIER

O USO DO DIALETO NA LÍNGUA DE KAGOSHIMA

Monografia submetida à Faculdade de Letras da Universidade Federal do Rio de Janeiro, como requisito parcial para obtenção do título de Licenciado em Letras na habilitação Português – Japonês.

Orientador: Prof. Dr. João Marcelo Amaral Reimão Monzani

RIO DE JANEIRO

2022

RESUMO

XAVIER, Gabriel dos Santos. **O uso do dialeto na língua de Kagoshima**. Trabalho de Conclusão do Curso de Licenciatura em Letras: Português-Japonês. Faculdade de Letras, Universidade Federal do Rio de Janeiro. Rio de Janeiro, 2022.

No passado, havia na atual província de Kagoshima um dialeto bastante característico da região. No entanto, com a expansão dos meios de comunicação em massa e após anos de políticas educacionais que tentaram neutralizar o dialeto local e substituí-lo pela língua padrão, mais recentemente, tem se observado na região a emergência de uma variante mais próxima da língua padrão conforme falada em Tóquio, sobretudo entre os falantes mais jovens. Neste trabalho, por meio de enquete e entrevistas, foram colhidos e analisados dados referentes ao uso de formas de expressão típicas do dialeto tradicional de Kagoshima por jovens universitários da cidade. Assim, constatou-se que algumas dessas formas de expressão já são desconhecidas pelos jovens ou, segundo os relatos dos entrevistados, só são usadas por idosos, embora todas elas fossem comuns até apenas cerca de duas décadas atrás. Por outro lado, observa-se que há algumas outras que ainda são usadas regularmente até mesmo pelos jovens. Acredita-se, então, que a questão da continuação do uso ou da queda em desuso dessas expressões relacione-se ao seu nível de similaridade a expressões da língua padrão. Ou seja, as formas dialetais similares a expressões da língua padrão, sem o estigma de dialeto, continuam a ser usadas regularmente, enquanto as mais destoantes são evitadas e, eventualmente, descartadas e substituídas pelas da língua padrão.

Palavras-chave: língua japonesa, Kagoshima, uso de dialeto

鹿児島市にはまだ方言があるのか
—大学生の方言使用と方言意識—

鹿児島大学 法文学部

リオデジャネイロ連邦大学 文学部日本語学科

ドス サントス シャビエル ガブリエル

目 次

1. はじめに
2. 方言と共通語との関係性
3. 現代に辿り着いた鹿児島方言
4. 調査法と目的
5. 調査結果
 - 5.1. 「ダカラヨー」
 - 5.2. 「オツカレサマ」
 - 5.3. 「デスデス」
 - 5.4. 「ダッタ」
 - 5.5. 「ケ」
 - 5.6. 「ヤスクデ」
 - 5.7. 「ナオス」
 - 5.8. 「ガ」
 - 5.9. 「クル」
 - 5.10. 「デスヨ」
 - 5.11. 「タノシイデシタ」
 - 5.12. 「チレテル」
 - 5.13. 方言意識と方言に対する態度
6. 鹿児島市における鹿児島方言の将来には何が待ち受けているか
7. まとめ

参考文献

添付資料 一 調査票

1. はじめに

日本における方言は多様性に富んでいる。東条（1954）の日本語方言区画によると、日本語の本土方言は大別すると、東部方言、西部方言、九州方言という三種に分けられる。本稿で注目する鹿児島市方言は九州方言の中にある薩隅方言の1種である。

鹿児島市方言はいくつかの変種があるが、鹿児島市で使われているものがもっとも共通語に似ていると言える。それは、戦争中、国語教育における「方言矯正」という姿勢が鹿児島県に強くあり（前田達郎、2013）、最もその影響を受けたのは鹿児島県の中心である鹿児島市だったからであろう。

また、近年、マスメディアの発達に伴って、特に都市部の若年層の間で、共通語化という現象が見られる。共通語化は、前田晃良（2013）の定義によると、マスメディアなどの影響を受けて地域言語が共通語に浸食されていく現象である。その例として、自分の出身地の言葉でない言葉（特に東京の言葉）を使う人が増えていることが挙げられる（松田、1998）。一方、清水（2017）は、方言話者は共通語だと思いながら、方言で話す場合も少なくないと述べている。鹿児島市の若者も例外ではないかもしれない。

そこで、本研究では、鹿児島市の大学生が使うことばとそれに対する意識を尋ねた調査を通して、鹿児島市で使われる鹿児島方言の現状とその話者の意識や地域で使用されていることばに対する態度を検討していきたい。

2. 方言と共通語との関係性

三井（2001）は、共通語は東京で使われる日本語を基盤としたことばだが、方言はそうではなく、ある地域に限って使われることばと定義する。国語という科目が学校に導入された時から、方言の存在と共通語指導が対立関係になっているという。

国民のため全国で通じる共通語を定めようという民主的な気持ちにあふれた理念は、特に戦争直後に沖縄と鹿児島で行われた共通語教育では、実践において、正しくない方法が大いに採用された。例えば、当時の学生が方言や方言的音調で話したことでいわゆる方言札やアクセント札をつけさせられたり（原田、2009）、掃除させられたり、叩かれたりして（内山、2001）、罰則を与えられた。こうしたことは方言矯正活動と言い、前田達郎（2013）によると、方言を弾圧して国民に「正しい国語を話させよう」という目的を持った戦争中から、戦争直後にかけて行われた政策である。

これが原因で、方言コンプレックスを植え付けることにならないようにという心配があった（柴田、1958）。札渡しは遊びのように子供の間で行われたため（近藤、2005）、そうした深刻な状況に及ぶことはなかったかもしれない。しかし、そうだとした場合、「方言は悪いことばだ」、「方言は避けるべきだ」という発想は当時の教育を受けた人の体に染み込んだと考えられる。次にそれについて考えていきたい。

3. 現代に辿り着いた鹿児島方言

次の表は内山（2001）が、方言矯正がどのような教育だったかを年代別に示し、まとめたものである。

表1. 「どのような教育だったか」(内山, 2001)

	「高」世代 1912-36	「中」世代 1937-54	「若」世代 1955-
共教育「ある」	30/57(53%)	36/51(71%)	9/37名(24%)
注意「ある」	「共通語を使い ましょう」	「共通語を使いましょう」 「いいことばを使いましょう」 「悪いことばを使わないよう にしましょう」 努力目標あり	「共通語を使いましょう」 努力目標あり
罰則「ある」	12/57(21%)	13/52(25%)	2/37名(5%)
どのような 罰則	たたかれる (柳, 竹) 方言札, タスキ, パッチ 表に○×	たたかれる(ビンタ) 方言札 掃除 走る, たたされる, 正座	タスキ 掃除

表1から分かるように、最も方言矯正活動が厳しかったのは1937年から1954年にかけて戦中と戦争直後の時期である。これを踏まえて、木部（1996）の鹿児島市における鹿児島方言使用に関する年代別データを見てみよう。

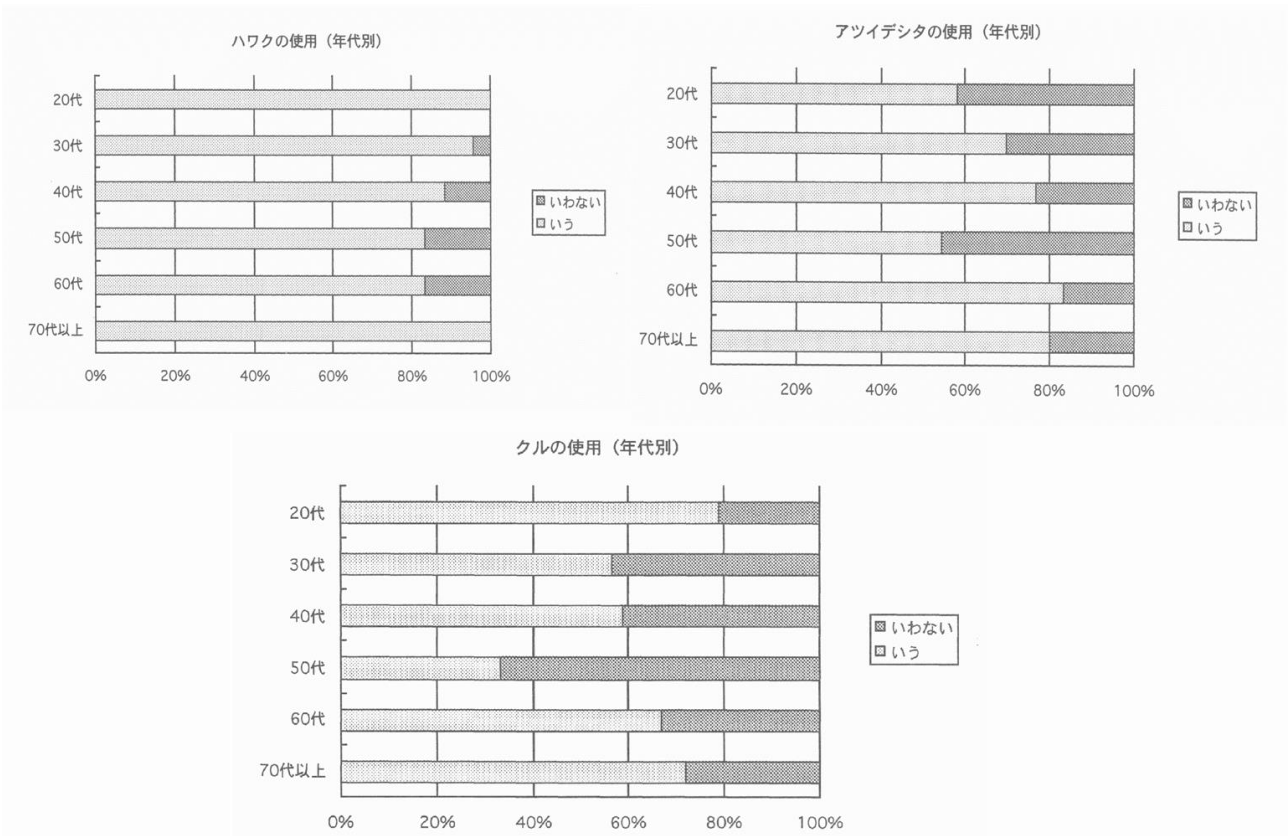


図1. 鹿児島方言独特の言葉を使う鹿児島市出身の人の割合 (年代別) (木部, 1996)

木部（1996）の調査で鹿児島方言独特の言葉を使わない人がもっとも多い50代はまさに山内（2001）が述べた、1937年から1957年にかけてかなり厳格な共通語教育を受けた人だということが分かる。したがって、その世代はかなり強く方言矯正活動を実感したと言っても過言ではな

い。一方、若年層の方言使用率を他の世代と比べて見ると、鹿児島市においては、鹿児島方言が回復傾向にあるように思われる。

4. 調査法と目的

以上は約20年前のデータであるため、鹿児島市における鹿児島方言が現在どうなっているかを検討する必要があると考える。そのため、鹿児島市の大学生に自分の言語・方言使用について尋ね、現在の鹿児島市で使われる鹿児島方言が回復傾向にあるか、あるいは共通語化傾向にあるかを明らかにしたい。

そこで、まず、鹿児島大学の学生の中から、鹿児島市生まれの人を5人募集し、予備調査として参加者にアンケート調査票¹を配布し、回答してもらった。本研究で使用した調査票は太田（2005）と木部（1996）をもとに作成したもので、参加者に鹿児島独特の言葉の使用を尋ねた。

なお、大田（2005）と木部（1996）の調査法では、調査票回答から得たデータしかなかったため、それから考察できることに限界があると思われる。そこで本研究では、話者の言語的意識や態度に関する、より深い情報を得るために、調査票の回答を踏まえて方言の使用、あるいは不使用の背景にある発想や意識を尋ねるインタビューを行った。

ただし、参加者募集が鹿児島大学の法文学部で行われ、そこに女性が圧倒的に多かったため、男性の言語使用や意識に関するデータを収集できなかった。男性の協力者は一人しかおらず、アンケート調査には回答してもらったが、一人だけでは信頼に足る分析ができないため、インタビュー調査は行わず、ここでは男性のデータは省略することとする。

5. 調査結果

以下、アンケート調査の回答からできた図とインタビュー調査で得た情報をもとに、調査項目を一つずつ見てみよう。

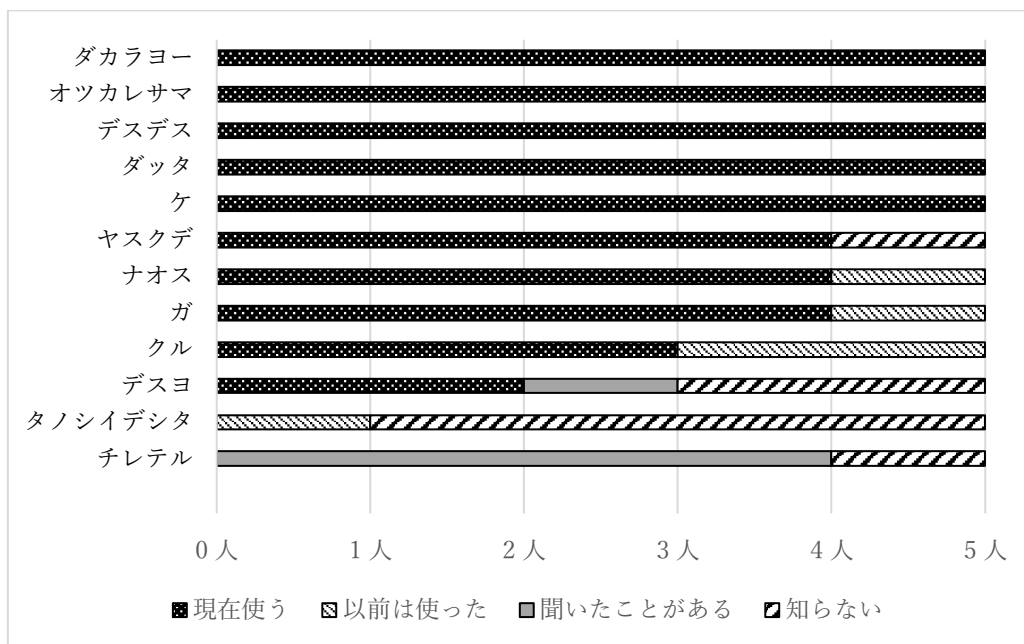


図2. 鹿児島特有のことばの使用

¹調査票は本稿の末尾に添付。

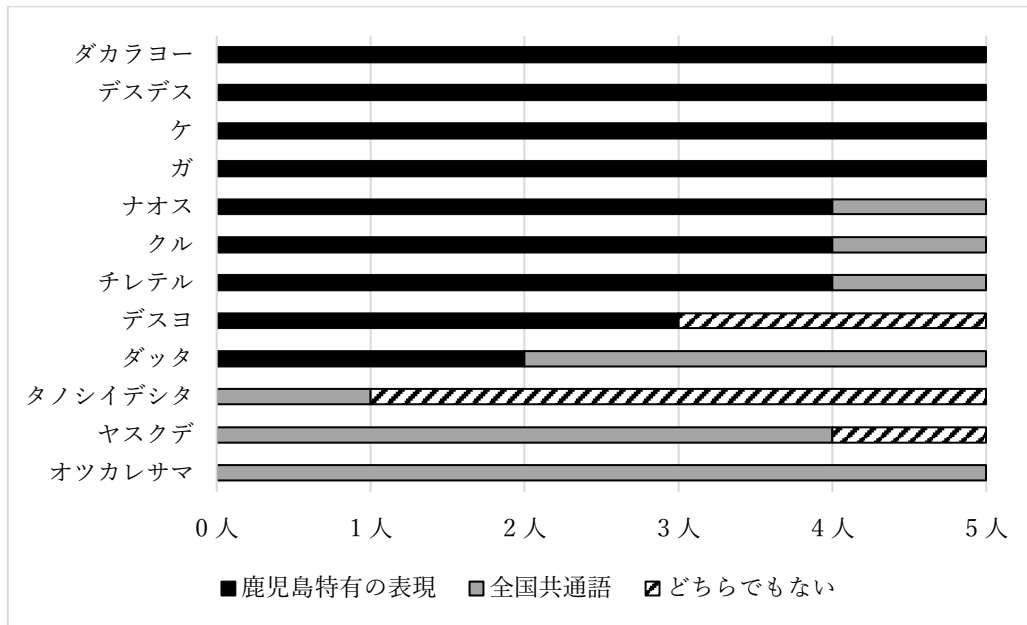


図3. 鹿児島特有の表現だと思うか、共通語だと思うか
(注：項目の順番は図3とは異なる)

5.1. 「ダカラヨー」(現在使う：全員)

「ダカラヨー」は相手の話に同意を表すあいづちとして使われる表現である。鹿児島方言であるとの意識が高く、若者を含めて全年代で使われている。インタビューで得た情報によると、最近の若者には「ダカラヨー」が方言だと認知されて、その表現を使うのを避けようとする人が増え、「それな」、または「ねえ」という共通語的な表現の使用が増加傾向にあるそうだが、被調査者全員が現在「ダカラヨー」も使うと答えた。また、相手が目上だとどのような表現を使うかと聞くと、被調査者は「そうですね」、あるいは「ですね」を使うと答えた。

5.2. 「オツカレサマ」(現在使う：全員)

共通語では、「お疲れさま」を別れの挨拶として使うのが普通だが、鹿児島の用法では、会ったときの挨拶としても「オツカレサマ」という表現が使われる。共通語であるという意識が非常に高い。

木部(1996)によると、この用法は鹿児島在来方言の「オヤットサー」という表現の共通語への翻訳によるものである。「オヤットサー」は現在の鹿児島方言の「オツカレサマ」と同様に、作業が終わった後だけではなく、出会ったときの挨拶にも用いられたものである。

被調査者によると、特に大学や仕事先で知り合った親しい相手には「こんにちは」があまりにも硬い表現に思えて言いにくいと感じるため、普通は「オツカレ(サマ)」や「やっほー」というような響きが比較的軽い挨拶にすることが多い。ただし、高校生のときからの友達には使わないという。したがって、相手との関係より、その関係が始まった場面に関連して使い分けられている表現のようである。

また、目上の人への挨拶としても使いにくさはまったくないらしい。「です」をつけるだけで問題なく使える表現である。

5.3. 「デスデス」(現在使う：全員)

鹿児島の代表的なあいづち表現と言える「デスデス」は共通語の「そうです」と同じ意味であり、方言であるという意識が非常に高い。それにも関わらず、全年代でよく使われている。参加者の中では、最初は共通語だと思っていたが、そのうち、鹿児島方言だと指摘されたという人もいた。しかし、指摘されても、周りの人がしきりに使っている表現なので、つい使ってしまうのだろう。

そうはいっても、どんな場面でも使える表現だというわけではない。被調査者によると、「相手が偉い人」の場合は、「デスデス」はちょっと使いにくい。方言より共通語のほうが社会的に高く評価されており、「デスデス」は方言だという意識が高いからこそ、そうした丁寧な場面ではできるだけ評価が高いことばで話すことは一般的な言語的行為だと思われる。

5.4. 「ダッタ」(現在使う：全員)

この項目で注目された「ダッタ」というのは忘れていたことを思い出した際に使う表現であり(例：「昨日来るって言ってたのに、来なかったね」「ダッタ！ごめん」)、共通語意識でよく使われている。その丁寧体に当たる「デシタ」という表現の場合も共通語であるという意識が高い。しかし、共通語だと思っている参加者が五人中三人だったのに対して、改まった場面の場合、「そうでした」という共通語的な表現をなんとなく好むと言い、無意識に使い分けをしている人もいた。

5.5. 「ケ」(現在使う：全員)

「ケ」は何かを尋ねる際に文末につけることばであり(例：「明日休みケー」)、方言であるという意識が非常に高い。共通語の形にすればどうなるかと尋ねてみると、「かな」、「だっけ」、終助詞をつけないで上がるイントネーションで言うという答えが出た。しかも、共通語の「だっけ」に形式が似ているためか、県外の人と話す際にもやや気軽に使える表現だと答えている。

5.6. 「ヤスクデ」(現在使う：四人、知らない：一人)

「ヤスクデ」は「安い値段で」という意味であり、共通語であるという意識がかなり高い。参加者の中で「ヤスクデ」が方言だと答えた人が一人もいなかった。共通語である「安く」も使われるそうだが、木部(1996)が報告した通り、「安く」だけでは何か足りないような気がするという話者が多い。インタビューでは「安く」は間違った日本語に聞こえるという発言もあった。しかも、ほとんどの印刷物に載っているのが「安く」であるにも関わらず、書く時は「ヤスクデ」しか使わないという人もいた。

5.7. 「ナオス」(現在使う：四人、以前は使った：一人)

「ナオス」は共通語の「片づける」に近い意味で使われ、方言であるという意識がかなり高い。それでも、全年代で使用されているようだ。共通語の「片づける」も被調査者全員によく使われているが、意味が微妙に違うため、使い分けているという。

インタビューで得た情報によると、「ナオス」はもとの場所に戻す、「片づける」は掃除、整理、整頓するという風に使い分けている。また、「ナオス」は「戻す」とどう違うかと尋ねてみると、「ナオス」の場合は決まった場所があって、そこに戻すというニュアンスが含まれているという。

このことから、「ナオス」は「片づける」と「戻す」の間にあるようだ。

5.8. 「ガ」(現在使う：四人、以前は使った：一人)

「ガ」は「～しよう」と誘うときに文末につけることばであり(例：「天文館に行くガー」)、方言だという意識が非常に高い。普通、動詞にしかつけないことばだが、「しなくてもいい」という意味で特別に形容詞の「良い」につけて「良いガ、良いガ」という風に言うこともある。

この言い方がかなり強く聞こえるため目上の人には使わないらしい。また、その言い方が強いという理由で完全に「ガ」を使わなくなったという人もいた。

相手が目上だと使わないということは、丁寧に「ガ」をつけるのが非文法的であるということによっても考えられる(例：×「天文館に行きますガー」)。このため、相手が目上の場合、共通語の「行きましょう」が用いられる。

5.9. 「クル」(現在使う：三人、以前は使った：二人)

この表現は形式が共通語の「来る」と同一だが、鹿児島方言の用法では、相手が自分のところに移動することだけではなく、自分が相手のところへ移動するという意味も表す。後者の意味合いは、共通語だと、「行く」の用法に当たる。

これは方言であるという意識がかなり高い。それは、「クル」はよく取り上げられる鹿児島方言の代表的な表現の一例だからであるかもしれない。そのため、教科書などに載っているのが「行く」だと気づいたり、鹿児島でしか使わない言い方だと知ったと答える人がいた。また、それをきっかけに共通語の「行く」を使い始めたという人がいた。

しかし、「行く」か「クル」かどちらを聞いても特に違和感がないようである。また、おばあちゃんと話していると「クル」を使ってしまうという風に話し相手によって無意識に使い分けをしているという被調査者もいた。

5.10. 「デスヨ」(現在使う：二人、聞いたことがある：一人、知らない：二人)

「デスヨ」は話し相手の言うことに同意を表す表現であり、用法からして「ダカラヨー」の丁寧体と言ってもいいかもしれない。この項目では、方言っぽくはないが、あまり聞かないという答えがあった。現在使うと答えた二人は同じ意味で「デスデス」(相手が目上の場合)、「ダカラヨー」と「それな」(相手が目下の場合)を使うほうが多いと言っていた。ほかの参加者は「デスヨ」を使わない、または聞かないと答え、「デスデス」、「デスヨネ」、「そうですね」(相手が目上の場合)と「それな」、「だよね」、「ダヨダヨ」、「本当よ」などのような表現を使うと言っていた。

5.11. 「タノシイデシタ」(以前は使った：一人、知らない：四人)

これは鹿児島の在来方言的な丁寧体過去形の形式である。この表現については「知らない」、「誰も使わない」という回答が圧倒的に多かった。したがって、共通語か鹿児島特有の表現かと聞くと、「どちらでもない」という答えが大半であった。20年前に木部(1996)が述べた「形容詞現在形+デシタ」というパターンでできた「アツイデシタ」という同じような表現がよく使われていたのにひきかえ、今回の調査では現在、口語でも文章でもそうした表現を使う人がほとんどいないようだ。

使ったことがあると答えた参加者は一人だけで、かなり特殊な場面でわざと使ったそう。それは、インターネット上で画像を投稿する際に「楽しい！！でした」というような文章をつけたりしたというものである。本人によると、「楽しい」という気持ちを強調するつもりで使っていて、「楽しかったです」が丁寧すぎて使いにくいという気がしたからだそう。また、「ちゃんとした文章じゃない」ため、砕けた場面で若年層しか使わないと答えた。もう一人は、あまり日本語に慣れていない人のことばのようだと発言した。

20年しか経っていないのに、以前よく使われており、「共通語意識が高い」と木部（1996）が報告した鹿児島特有の表現がほぼ完全に使われなくなり、忘れられてしまうとはかなり驚くべきことだ。これは、現在の若者の親の世代もほとんど使わなくなっているということではないかと考えられる。

5.12. 「チレテル」（聞いたことがある：四人、知らない：一人）

「チレテル」は共通語の「散らかっている」と同じ意味であり、この項目では「聞いたことがある」という答えが圧倒的に多かった。インタビューで得た情報では、現在の若者は、「チレテル」をまったく使わず、共通語の「散らかっている」しか使わなくなっている。どんな世代が「チレテル」を使うと思うかと尋ねてみたら、全員が高年層しか使わない表現だと答えた。

確かに、木部（1996）が「年代別の使用率を見ると若年層では使用されなくなりつつある傾向が見える」と述べたように、25年後の今回の調査でその傾向が確認され、鹿児島市においてはこの表現が完全になくなりつつあるようである。

5.13. 方言意識と方言に対する態度

1) 県外の人と話しているときに鹿児島方言で話したら、恥ずかしくなったり気になったりすることがあるかと尋ねてみると、あると答えた被調査者が三人いた。特に相手にうまく通じない場合とイントネーションを指摘される場合が恥ずかしいという。ほかの二人は恥ずかしくはないが、単語の意味を聞かれたりしてびっくりしたという程度のことがあったという。

しかも、恥ずかしいと答えた参加者の一人は実は母親が栃木県出身であり、よく母親に方言を指摘されていたそう。そのため、自分の言語意識度がほかの参加者より高くなり、共通語寄りの話し方を身につけ、鹿児島特有の表現を多少やめたという。ただし、相手が鹿児島の人だと、方言で話すのが全然恥ずかしくないが、そうではない場合は、周りの人の言い方に合わせたほうがいいのではないのかなと思う程度の恥ずかしさしか感じないという。したがって、方言使用を指摘されていても、方言コンプレックスにはなっていないようである。

2) 次に、鹿児島の人と話すときに親しくなったら、鹿児島の表現をもっと使うようになることがあるか、それとも最初から普通に使うかと尋ねてみると、ここにも溝が見えた。最初はあまり使わないが、親しくなったら使うと答えた人が三人いたのに対して、「最初から鹿児島弁が自然に出てしまう」と答えた参加者が二人であった。ここで面白いのは、このような場面で最初から普通に鹿児島方言を使うと答えた参加者の一人は栃木県出身の母親によく方言を指摘されたその参加者である。このことから、方言で話すこと自体が恥ずかしいと思っているのではなく、うまく通じない、あるいは相手に話し方が変に思われる場合が恥ずかしいと思っているのではないかと思われる。

さらに、県外の人と話すときに親しくなったら、鹿児島表現を使うようになることがあるか、それとも最初から気軽に使うかと尋ねてみると、最初は絶対に使わないという答えが圧倒的に多かった。微妙な差が見られたのは「親しくなったら」のところであった。そこで、栃木県出身の母親によく方言を指摘された参加者はずっと方言を使わないようにすると答えたのに対し、ほかの四人は親しくなったら、気軽に方言を使うようになる、または無意識で使ってしまうと答えた。

3) そして、県外の人と話しているときに共通語、または共通語に近いことばで話そうとすることがあるかと尋ねてみると、三人は「ある」、ほかの二人は「意識しない」と答えた。参加者の一部は長い間鹿児島に住んでいる話し相手だと、そういう使い分けをしないと行ったことから、このことも前に述べたように通じないことを心配しているだけなのではないだろうか。

4) 高校生の友達と話すときのことばと、大学でできた友達と話すときのことばでは、何か違いがあると感じるかと尋ねてみると、また溝が現れた。二人は「まったく違う」、三人は「大した差があるとは感じない」、または「慣れてきたら、相手の出身に関わらず、鹿児島方言で話す」と答えた。「まったく違う」と答えた者の一人は、まさに母親に方言を指摘されていた参加者なのである。彼女によると、高校生のときの友達とは何も気にすることなく完全に鹿児島方言で話すが、大学でできた友達の場合は訛っているというのが恥ずかしいと思っている人や、県外出身の人もいるため、なるべく共通語で話すようにしている。方言を使わない鹿児島出身の友達と話しているときにも共通語を使うという。

また、大学で会った人と親しくなったら、相手の出身に関わらず高校生のときの友達と同様に鹿児島方言を使うようになるが、県外出身の人と大学で最初に出会った瞬間は相手の言い方やイントネーションに合わせて話すという使い分けをしている参加者もいた。

5) 最後に、両親と祖父母と子供の頃から同居している参加者に自分が使うことばと一緒に住んでいるおじいさんとおばあさんのことばとでは何か差があると感じるかと尋ねてみた。彼女によると、おじいさんとおばあさんのほうが自分より方言をよく使う。また、自分が使うのとは違う単語や分からない単語もたまに出てくるという。分からなかった単語の例として、最近覚えた「寂しい」という意味をもつ鹿児島方言の「トゼンネ」を挙げた。

しかも、自分の家に友達が来た時、鹿児島出身の友達でも祖父の話が一向に分からなかいことが何回もあったという。彼女自身は子供の頃から祖父母と一緒に住んでいるため、もちろん話が聞き取れるが、そうではなく鹿児島在来方言にあまり接触したことがない若者には、鹿児島出身ではあっても、かなり分かりにくく、まるで外国語のように聞こえるらしい。

6. 鹿児島市における方言の将来には何が待ち受けているか

以上のようなことから、昔のさまざまな困難にも関わらず、鹿児島方言は鹿児島市でもまだ活発に生き残っているとと言えるだろう。もちろん、在来方言と違うものには変わってきてはいるが、いくつかの特徴的な表現を持っており、若年層の間でもよく使われているということからすると、近い未来になくなることはないと思われる。

しかし、なくなりそうにないと言っても、鹿児島方言はほかの地域方言と同様に共通語に近く

なる傾向にはあるかもしれない。在来方言に接触する機会があまりない友達には祖父母の話がなかなか分からないという参加者の一人が挙げてくれた事例がその証拠の一つであろう。そのため、具体的にどのような形になっていくかを考える必要がある。

まず、活発に使われていることばとなくなりかけていることばとでは、パターンが見られる。清水（2017）が目にしたように、若年層による方言使用は方言としての気づかれにくさに関わっており、気づかれやすいものは共通語にされ、気づかれにくいものはそのまま残るといったような傾向が見られる。このような理由で、共通語に形式が似ているものはそのまま使われ続けることが多い。「オツカレサマ」と「ヤスクデ」がその例であるかもしれない。一方、「タノシイでした」、「チレテル」などのように形式が共通語とかなり違う表現は、気づかれやすく、使われなくなる傾向が見られる。

また、テレビ番組で、ある表現が鹿児島方言として取り上げられるのを見て、それが方言だと初めて認識したという参加者もあり、メディアの影響がある程度確認できた。必ずしも方言だと知って使わなくなるわけではないが、メディアが方言を取り上げるのは方言が使われなくなるという方向への一歩になりかねないことであり、間接的に影響を与えるものだと言える。

最後に、ここで不思議に思うのは、「ダカラヨー」、「デスデス」、「ガ」などのような表現の場合、方言と分かっているにも関わらず、若者の間でもあまり気にすることなくよく使われている点である。それは、周りの人に常に使われている表現はやめる必要を感じない、また目立たないように周りに合わせたほうがいいという無意識な行動を生む社会心理的現象が働いているとも考えられる。

要するに、鹿児島市における鹿児島方言は在来方言に戻る傾向がなく、共通語に取り替えられる傾向にもないと思われる。共通語的な要素を取り入れてはいるが、鹿児島特有の要素も活発に用いられている。したがって、どちらかというところ、井上（2008）が提唱した、1. 共通語とされるものとは語形が違う；2. 若い世代に広がりつつある；3. 改まった場面ではあまり用いられないという三つの条件をもつ新方言という方向に進み、新しい形に変わりながらも、特徴を持ち続ける方言のままで生き残っていく傾向にあると考えている。

7. まとめ

以上、本研究では、鹿児島市出身の大学生の方言使用や意識をもとに鹿児島市における方言の現状を調べてみた。現在の鹿児島方言は在来のものでかなり違い、共通語に近くはなってきたが、特徴的な要素がいくつか残っており、全年代で活発に用いられている。確かに、場面によって、共通語との使い分けが見られるが、方言と共通語の間では、競争的な関係があまり見られず、バイリンガリズムのような関係で共存しているようである。

本稿では、少なくとも、鹿児島市にはまだ方言があるのかという点についてはある程度明らかにすることができたと思う。しかし、今回の研究は、時間の制限、条件に該当する男性がなかなか見つからず女性でしか行われなかった点、調査の対象者が少人数であるなどというような点があり、本稿の分析や結論に限界があることは十分に理解している。

したがって、より明確な結果が得られるように、今後の課題としては、男女のバランスが取れた調査を大規模で行う必要があると思われる。また、ここで注目したのは単語のレベルのものであったため、統語論、音韻論、形態論などというほかの言語学的な面から方言の進化を検討する

こともこれから重要な課題になると考えている。

参考文献：

東条操（1954）「日本方言学」吉川弘文館

柴田武（1958）「日本の方言」岩波新書

木部暢子（1996）「鹿児島市とその周辺地域における地域共通語の実態とその教育に関する研究」
文部省科学研究費成果報告書

松田美香（1998）「大分方言の新傾向と方言意識」『別府大学アジア歴史文化研究所報』第16号
44-44 別府大学アジア歴史文化研究所報編集委員会

内山奈美（2001）「鹿児島県における標準語教育についての研究」

太田一郎（2005）「都市内部の言語変異勢力と話者勢力の分布に基づく都市方言研究法の開発」
萌芽研究 研究成果報告書

近藤健一郎（2005）「近年沖縄における方言札の実態：禁じられた言葉」『愛知県立大学文学部論
集国文学科編』第53号 3-14 愛知県立大学日本文化学部

井上史雄（2008）「新しい日本語 —《新方言》の分布と変化—」明治書院

原田大樹（2009）「昭和30年代の共通語指導における『懲罰』と『奨励』」『広島大学大学
院教育研究科紀要』第2部 第58号 149-156 広島大学大学院教育研究科

三井はるみ（2011）「我が国における言語・方言の現状」『危機的な状況にある言語・方言
の実態に関する調査研究事業』17-34 報告書 国立国語研究所

前田晃良（2013）「地域言語の潜在可能性」『教育研究 The bulletin of education』第39号 103-
118 大阪大谷大学教育学会

前田達郎（2013）「鹿児島県の国語教育における標準語／方言イデオロギー—戦中の「指導書」
と戦後の教育雑誌をてがかりとして—」日本語・日本学研究第3号 23-42 東京外国語大学国
際日本研センター

清水はるな（2017）「駒ヶ根市の中学生250人の方言と方言意識」『ことばと文化』第8号 1-14
長野・言語文化研究会

添付資料 アンケート調査票

基本情報

1. 氏名（表示されません）：
2. 性別： 男性 女性
3. 今、何歳ですか。
4. 鹿児島市生え抜きですか。 はい いいえ
5. 通った小学校の所在地（例：～県～市）を教えてください。
6. 通った中学校の所在地（例：～県～市）を教えてください。
7. 通った高校校の所在地（例：～県～市）を教えてください。
8. 父親とどのぐらい同居したことがありますか。（例：X歳～Y歳、または「ない」）
9. 母親とどのぐらい同居したことがありますか。（例：X歳～Y歳、または「ない」）
10. 祖父とどのぐらい同居したことがありますか。（例：X歳～Y歳、または「ない」）
11. 祖父とどのぐらい同居したことがありますか。（例：X歳～Y歳、または「ない」）
12. 祖母とどのぐらい同居したことがありますか。（例：X歳～Y歳、または「ない」）
13. その他の人と同居したことがありますか。「はい」の場合は、何歳から何歳までかとその人の年代を教えてください。
14. 同居したことがある人の出身地を教えてください。

	鹿児島県鹿児島市	鹿児島県鹿児島市外	鹿児島県外	同居したことがない
父親	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
母親	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
祖父	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
祖母	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
その他の人	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

親しい相手と普段話をする時のことばについてお尋ねします。当てはまる答えを一つ選んでください。

1. 同意を表すあいづちとして「ダカラヨー」という言い方をしますか。（例）「なんでこの授業いつも退屈なのー」「ダカラヨー」
現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
1. 1. 「ダカラヨー」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
1. 2. 「ダカラヨー」という表現はどのような人が使うと思いますか。
誰も使わない 若年層（30代まで） 中年層（50代まで） 高年層（60代以上） 誰も使わない
2. 「安い値段で」という意味で「ヤスクデ」と言うことがありますか。
（例）「バーゲンだったからこの服ヤスクデ買ったんだよ」
現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
2. 1. 「ヤスクデ」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
2. 2. 「ヤスクデ」という表現はどのような人が使うと思いますか。
誰も使わない 若年層（30代まで） 中年層（50代まで） 高年層（60代以上） 誰も使わない
3. 「楽しかった」ということを丁寧に言うときに、「タノシイデシタ」と言うことがありますか。
（例）「昨日は映画館に行ってタノシイデシタ」
現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
3. 1. 「タノシイデシタ」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
3. 2. 「タノシイデシタ」という言い方はどのような人が使うと思いますか。
誰も使わない 若年層（30代まで） 中年層（50代まで） 高年層（60代以上） 誰も使わない
4. 話し相手の言うことに同意するとき、「デスヨ」と言いますか。（例）「近頃若い人はみんな髪を染めてますからね」「デスヨ」
現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
4. 1. 「デスヨ」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
4. 2. 「デスヨ」という言い方はどのような人が使うと思いますか。

「鹿児島市にはまだ方言があるのか」

- 誰も使わない 若年層 (30代まで) 中年層 (50代まで) 高年層 (60代以上) 誰も使わない
5. 「そうです」という意味のあいづちとして、「デス」または「デスデス」と言うことがありますか。
 (例)「昨日はおいそがしかったですね」 「はい、デスー」
 現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
5. 1. 「デス」または「デスデス」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
 鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
5. 2. 「デス」または「デスデス」という言い方はどのような人が使うと思いますか。
 誰も使わない 若年層 (30代まで) 中年層 (50代まで) 高年層 (60代以上) 誰も使わない
6. 忘れていたことを思い出したときに「ダツタ」と言うことがありますか。
 (例)「昨日来ると言ってたのに来なかったね」 「ダツタ!ごめーん」
 現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
6. 1. 「ダツタ」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
 鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
6. 2. 「ダツタ」という言い方はどのような人が使うと思いますか。
- 誰も使わない 若年層 (30代まで) 中年層 (50代まで) 高年層 (60代以上) 誰も使わない
7. 何かを尋ねるときに、文の終わりに「ケ」ということばをつけることがありますか。(例)「明日学校休みケー」
 現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
7. 1. 「ケ」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
 鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
7. 2. 「ケ」という言い方はどのような人が使うと思いますか。
- 誰も使わない 若年層 (30代まで) 中年層 (50代まで) 高年層 (60代以上) 誰も使わない
8. 「～しよう」と誘うときに、文の終わりに「ガ」ということばをつけることがありますか。(例)「天文館に行くガー」
 現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
8. 1. 「ガ」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
 鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
8. 2. 「ガ」という言い方はどのような人が使うと思いますか。
- 誰も使わない 若年層 (30代まで) 中年層 (50代まで) 高年層 (60代以上) 誰も使わない
9. 「片づける」ことを「ナオス」と言うことがありますか。(例)「春になったので、こたつをナオス」
 現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
9. 1. 「ナオス」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
 鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
9. 2. 「ナオス」という言い方はどのような人が使うと思いますか。
- 誰も使わない 若年層 (30代まで) 中年層 (50代まで) 高年層 (60代以上) 誰も使わない
10. 「片づいていない」ことを「チレテル」と言うことがありますか。(例)「部屋がチレテルから、お母さんに叱られた」
 現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
10. 1. 「チレテル」という言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
 鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
10. 2. 「チレテル」という言い方はどのような人が使うと思いますか。
- 誰も使わない 若年層 (30代まで) 中年層 (50代まで) 高年層 (60代以上) 誰も使わない
11. 相手のところへ動くときに「クル」と言うことがありますか。
 (例) (友達のところに向かって電話をかけた時)「今クルよ」
 現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
11. 1. 「クル」というこの言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
 鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
11. 2. 「クル」というこの言い方はどのような人が使うと思いますか。
- 誰も使わない 若年層 (30代まで) 中年層 (50代まで) 高年層 (60代以上) 誰も使わない
12. 朝、知っている人に会った時などの挨拶として「オツカレサマ」と言うことがありますか。
 現在使う 以前は使った 聞いたことがある 知らない
12. 1. 「オツカレサマ」というこの言い方は鹿児島独特ですか、共通語ですか。どう思いますか。
 鹿児島特有の表現 全国共通語 どちらでもない
12. 2. 「オツカレサマ」というこの言い方はどのような人が使うと思いますか。
 誰も使わない 若年層 (30代まで) 中年層 (50代まで) 高年層 (60代以上) 誰も使わない